

経済とビジネスの倫理に向けて

飢饉、セン、内在的实在論

大谷 弘

1. 経済とビジネスの倫理

企業の道徳的責任や内部告発、セクシャル・ハラスメントなどビジネス・エシックスの個々の分野においては倫理的な関心の重要性は徐々に認識されつつあるように思われる。本稿では、そのような流れを受けて経済のあり方と倫理的関心のつながりについて少し哲学的に踏み込んで議論してみたい。

本稿の第一部が扱うのは飢饉 (famine) である。この点で本稿の題名はあるいは不適切であるかもしれない。確かに、本稿の立場は後に見るように飢饉は経済的倫理的問題であるというものである。そして、経済活動において企業の果たす役割りの大きさを考えるならば、企業が社会の中で何をすべきかというビジネス・エシックスの重要問題と飢饉という問題は密接に関わっていると言えるだろう。しかし、本稿では飢饉における企業の役割を積極的に考察することはしない。従って、本稿の題名に「ビジネスの倫理」という語が入ることは誤解を生むものであるかもしれない。

だが、本稿が扱う問題がビジネス・エシックスの問題と何の関係も無いということはない。ビジネス・エシックスの問題を考えるためには、経済活動とはどのような活動であり、どのようにして理解されるべきなのかということを考えねばならないだろう。そして、本稿が目指すのは、経済活動を理解するに当たって我々が用いる客観性概念とはどのようなものなのか、経済活動の客観的理解とはどのようなことなのかということをも明らかにすることである。そして、このような本稿の目的が達成されたならば、経済活動と密接に関わるビジネス・エシックスの問題に対しても少なからず光を当てることができるだろうと思われるのである。

1-1. 飢饉とは何か

飢饉とは何であろうか？ 飢饉はまず飢餓 (starvation) とは区別されねばならない。一般的に、飢餓が単に人々が飢えていることを表すのに対し、飢饉は飢餓が突発的に広範にわたり深刻な程度において起こることを意味する。ここまでは

特に問題はないのだが、ここから更に飢饉を定義するという問題に取り組もうとすると困難がある。というのも、飢饉の定義についての一致した見解が存在せず、これまでに提案されている定義は飢饉についての理論を反映したものとなっているのである。例えば、食料供給量の不足として飢饉を定義するならばそれは飢饉を食料供給量により分析する理論を反映しているし、社会的経済的現象として飢饉を定義するならばそれは飢饉をそのようなものとして分析する理論を反映している。しかし、実際に何を飢饉と見なすかについて大きな不一致があるわけではなく、定義できないという困難は以下の議論にとっては問題とならない。実際、1943-44年のベンガル飢饉、1959-61年の中国の飢饉、1974-75年のバングラディシュ飢饉、あるいは1980年代以降のアフリカ諸国において起こった飢饉について、それらが飢饉であるということについては論争の余地はない。従って、本稿ではさしあたり定義の問題には関わらず、飢饉の理論を検討してみたい。

ところで、なぜ飢饉は倫理的問題となるのだろうか？旱魃や洪水などの自然災害や人口増加などにより食料が不足し飢饉が起こるならば、それは悲劇的なことではあるけれども、どうしようもないことであり、倫理的問題ではなくむしろ技術的な問題であると考えの方が自然であるかもしれない。しかし、飢饉が倫理的問題であるかどうかを判定するにはもう少し詳細に飢饉を分析する必要がある。以下ではまず飢饉に関する二つの異なったアプローチを検討してみたい。

1-2 . FAD 理論とその批判

伝統的に飢饉は「食料供給量の低下 (food availability decline)」として分析されてきた。アマルティア・センはそのような理論を一括して「FAD 理論」と呼んでいる。FAD 理論によると、何らかの理由によりある地域に供給される食料の総量と食料を求める人々の人口のバランスが崩れることで飢饉は起こる。すなわち、自然災害や人口増加によりある集団の必要とする食料の量に供給量が届かない場合に飢饉が起こると FAD 理論は考える。このように考えると、飢饉は悲劇ではあるが倫理的問題というよりはむしろ技術的問題であり、どのようにして災害を避けたり人口増加を抑制したりすればよいのかが問題となるのみであると思える。

しかし、1981年にアマルティア・センが『貧困と飢饉 (Sen(1981))』を出版して以来、FAD 理論は様々な反論にさらされてきた。センの FAD 理論に対する批判を見てみよう。センの批判は二つ存在し、ひとつは食料供給量の低下と飢饉の間には必ずしも相関関係はないというものであり、もうひとつは飢饉の際に飢える集団と飢えない集団が存在するといった違いを説明できないというものである。

前者の批判に関して、センは FAD 理論を直接的に反例を挙げて論駁する。センの実証的研究によると食料供給量の低下なしの飢饉は過去に存在している。例えば、1943 年のベンガル飢饉ではその年の食料供給量は前 5 年の平均と比べても 5%低いのみであり (Sen(1981) chap.6)、1974 年のバングラディッシュ飢饉ではその年が 1971~75 年で食料供給量がピークであった (Sen(1981) chap.9)。また、逆に食料供給量の低下は必ずしも飢饉を引き起こしておらず、例えば 1972~74 年のアフリカのサヘル飢饉ではサヘル諸国全体で見ると食料供給量の低下は起こっているが、細かく地域別に見ると供給量の低下が必ずしも飢饉に結びついてはいない (Sen(1981) chap.8)。すなわち、食料供給量の低下と飢饉の間に直接的な相関関係はないのである。ii

二つ目の、FAD 理論では飢饉の際の集団ごとの飢え方の差異を説明できないという批判を次に検討してみよう。FAD 理論によると、飢饉は食料供給量の低下により起こるのであった。しかし、飢饉の際にもすべての人が飢えているわけではなく、飢饉の際に被害を受けやすい人が誰なのかということを説明せねば飢饉を理解しているとは言えない。ある集団が飢饉の際に飢えているならば、その集団は食料を手に入れられなかったということである。しかし、センによるとなぜその集団が食料を手に入れることができなかったのかということを説明せずに、地域全体への食料供給量だけに注目してもそこから飢饉への理解は得られない (Sen(1981) p.154 (邦訳 pp.223-224))。現代のように食料の移動が可能な時代では、食糧不足を他の地域からの食料の移動で補うことができるはずなのである (cf. Devereux (1993) pp.27-28 (邦訳 pp.32-33))。

以上のことから言えるのは、FAD 理論は飢饉の理論としてはほとんど説得力を持たず、FAD 理論に基づいて飢饉を非倫理的な問題であると考えすることはできないということである。そして、飢饉の際に被害を受けやすいのは貧困層であるということ、また近年の飢饉は第三世界の諸国でのみ起こっており先進国では起こっていないということ、自然災害による凶作や人口増加は起こっているにも関わらず飢饉を抑えることに成功している国々が存在しているということiiiを考えると、飢饉は分配、不平等、正義といった倫理的観点に関わる問題なのである。

1-3 . エンタイトルメントアプローチ (entitlement approach)

前節で見たように飢饉を食料供給量の低下により分析する FAD 理論には難点があった。アマルティア・センは FAD 理論に代わる飢饉の理論として「エンタイトルメントアプローチ」を提唱している (Sen(1981) chap.5)。エンタイトルメ

ントアプローチは単なる食料供給量ではなく、人々が食料やその他の財をどのようにして手に入れうるか、すなわちエンタイトルメントを持つか、ということに注目する。形式的にはある個人 i のエンタイトルメント集合 E_i はその人の所有物の組み合わせである賦存量 (endowment) とその賦存量から手に入れることが可能な財の組み合わせの集合を規定する交換エンタイトルメント写像により決まる。いま、個人 i の食料最低必要量を満たす財の組み合わせの集合を F_i とすると、 E_i と F_i が互いに素であるとき、すなわち所有物から最低限必要な食料を得られないとき、その人は飢えているとされる。交換エンタイトルメント写像はその社会の法的、政治的、経済的、社会的特徴とその人の社会における地位により決まるので、それらの関係を分析することがエンタイトルメントアプローチにとっては重要な課題となる。つまり、実際に人々が食料を手に入れることができるのかどうかということから飢饉を分析するのがエンタイトルメントアプローチのやり方なのである。

エンタイトルメントアプローチは食料供給量の問題を軽視することにつながってしまうと批判されることがある。デブローは FAD 理論が食料供給量の問題に集中しすぎたように、エンタイトルメントアプローチが需要 (消費) の場面のみ集中してしまっていると言う (Devereux(1993) pp.77-78(邦訳 pp.100-101))。しかし、ラヴァリオンも指摘するように (Ravallion (1997) p.1209) この批判は誤解に基づいている。エンタイトルメントの概念は単に需要の場面のみを問題にしているのではなく、食糧供給や需要をもひとつのパラメータとして含むようなより包括的な概念なのである。実際、センは所得と購買力の不足という需要の側面にのみ注目して飢饉を分析するアプローチを批判している。センは「人々は食料を買う所得を持たなかったために死んだのなら、なぜ彼らは所得を持っていなかったのか? (Sen(1981) p.156 (邦訳 p225))」と問い、エンタイトルメントの喪失へ至る過程の手前で分析をやめたのでは飢饉への理解を得られないとする。

人々の食料へのエンタイトルメントを決定する要因は様々であり、例えばセンは 1943-44 年のベンガル飢饉での人々の交換エンタイトルメントの悪化の原因として次の 7 つを挙げている。すなわち、(1) 戦時のインフレ、(2) 投機的な貯蔵、(3) 行政の混乱および飢饉の光景の出現による食料の価格上昇の促進、(4) 政府による穀物の州外への輸出禁止措置による他州からベンガルへの穀物の流入の停止、(5) 戦時のインフレの恩恵を受けないことおよび労働の過剰による農業労働者の経済的立場の悪化、(6) 奢侈財への需要の減少、(7) 歴史的な物価の安定局面から上昇局面への変化に対応する制度の不在、である。(5) や (6) からわ

かるようにエンタイトルメントの悪化は単に所得だけが要因で起こるのではない。一般的に所得の低い貧困層が飢饉において被害を受けやすいと言われるが、貧困層の内部にも差異が存在する。同じ農民でも土地を持つ農民は食料の価格が上がったとしても、直接食料を手に入れることができるが、農場での賃金労働者は手に入れることのできる食料の量が減少する。また、奢侈財を売るサービス業者や職人も食料価格の上昇の影響を受けやすい (Sen(1981) pp.4-6 (邦訳 pp.6-8))。このような貧困層内での差異をも説明できるのはエンタイトルメントアプローチの利点なのである (Sen(1981) pp.156-157 (邦訳 pp.226-228))。

このようにエンタイトルメントの悪化という観点から飢饉を分析するならば飢饉は物の見方に関わるという意味で倫理的な問題であると言えるだろう。上記のように、飢饉の影響を受けやすい集団には差異がある。飢饉のような危機においてその影響を特定の集団が受けるのならばそれは明確に不公平の存在を意味するであろう。飢饉は単に食糧供給の問題ではなく、社会的経済的現象であり、社会保障の充実などの飢饉を避けるような制度を設計することが求められるのである。

2. セン

2-0. 潜在能力アプローチ

飢饉に対するエンタイトルメントアプローチはセンのより広い経済学的、倫理的な主張である「潜在能力アプローチ (capability approach)」の中に位置づけられる。潜在能力アプローチは厚生経済学 (welfare economics) における理論であるとともに、それを越え出た善や正義とは何かというような問いに関わる倫理的な理論でもある。従来の厚生経済学は人間の福祉 (well-being) を考えるにあたって効用 (utility) にのみ注目するという厚生主義 (welfarism) をとってきた。センはこれに替わって実際にその人が何を達成したかという機能 (functioning) そして何を達成する自由を持っていたかという潜在能力の点から福祉を考えるべきであるとする。以下ではこの潜在能力アプローチをそれと対立するアプローチと比較することでその概略を説明してみたい。

2-1. 対立するアプローチ

2-1-1. 顕示選好厚生主義

厚生経済学における社会的選択理論では任意の社会的状態の順序付けを行う社会厚生関数という道具だてにより議論を進めるが、厚生主義はその社会的状態の

順序付けは個人の効用に基づいて決定されると考える。すなわち、個人がどのような効用をその社会的状態において得るかということから、望ましい社会的な選択も決まると考えるわけである。

顕示選好厚生主義はこの個人の効用は実際の個人の選択において示されると考える。すなわち、個人が実際に選んだ行為はその個人が望ましいと見なしていることを表しており、それにより社会的選択も成されればよいと考えるのである。

センはこの顕示選好の理論には厳しい批判を向ける (Sen(1985) pp.18-19 (邦訳 pp.32-33))。いま、仮に福祉が効用からのみ決まるということは受け入れたとして、センの批判は実際の選択の理由を考慮しなければその選択が効用と結びついているかはまったく明らかではないというものである。実際、例えば、上司に言われて仕方なく残業すること、単に好みにより紅茶かコーヒーかを選ぶこと、義務を考慮したうえで慈善活動を行うことを選ぶこと、を単純に一樣に考えてしまっては効用を理解することはできないであろう。実際の選択という行為が本当にその人が望ましいと見なしていることから出てきているのかということとはまったく明らかではない。すなわち、その人がその選択を行った理由が効用と結びつく理由であることが保証されなければ、示された選好からその人の効用を測ることはできないのである。

2-1-2 . 功利主義

では顕示された選好に拠らず効用を考える立場はどうであろうか。功利主義的伝統はこの立場を採る。功利主義においては、効用は幸福や快樂あるいは欲望の充足として規定され、それにより福祉も決定される。このようにして規定された効用に基づく厚生主義は現代における功利主義の重要な特徴のひとつである。センは功利主義の特徴として、選択の帰結のみを考慮する結果主義、効用により福祉を考える厚生主義、分配を考慮せず効用の総和の最大化を目指す総和主義の3つをあげている (Sen(1999) pp.58-60 (邦訳 pp.64-66))。

センはこの功利主義による福祉の特徴づけにも批判を向ける (Sen(1985) pp.20ff (邦訳 pp.34ff) , (1999) pp.62-70 (邦訳 pp.68-70))。ivセンの批判のひとつは適応および精神的条件付けが存在するということである。人間の幸福や快樂を感じ、あるいは欲望を充足する能力は悪条件に順応してしまう。悪条件にある人々は自身の窮乏状態と折り合いをつけてしまい憤ましい達成に大きな効用を感じるということがありうる。もし、そのような人々の福祉を効用が大きいという理由で高く評価付けてしまっては福祉の基準としては適切なものとは言えないだ

ろう。この点はセンのもうひとつの功利主義的な効用の特徴づけへの批判にも関連している。それは、何が価値あるものであるかについてのその人自身の評価に目をつぶってしまっているという点である。センによると、功利主義は効用を幸福、快樂、欲望の充足として規定するが、そうすることで望ましいことの単一の基準を人々に押し付けてしまっている。人々がどのような人生を望ましいものとするのかという知的活動の可能性を用意することの重要性を功利主義的な観点は落としてしまっているとセンは考えるのである。

2-1-3 . ロールズの基本財アプローチ

効用に基づく福祉の評価は上記のようにセンにとって受け入れられるものではなかった。センは効用のような主観的、心理的なものにより福祉を考える限り福祉を測ることはできないと考える。ではより客観的な要素に注目することで福祉をよりよく捉えられるのではないだろうか。ここではセンの潜在能力アプローチと最もよく対比されるロールズの「基本財 (primary goods)」によるアプローチを検討してみたい。ロールズは『正義論 (Rawls(1971))』において「格差原理」を提出し、社会的経済的不平等は最も不利な立場にいる人の利益を最大化する形でのみ許されるとした。その際、ロールズが考慮するのは権利、自由、機会、所得、富、自尊心などの基本財である (Rawls(1971) § 15)。ロールズは人間の多様性を考慮したうえで原初状態においてどのような合意に至れるかということを検討したならば、これらの基本財に注目するのは妥当であるとする (Rawls(1980) pp.525ff)。すなわち、これらの基本財はどのような関心を持っているにせよ必要になるであろうと考えられているのである。

センはこの基本財アプローチに対しても批判を行う。ロールズの基本財アプローチは効用のような主観的なものから独立に福祉を測ることができるという点でこれまで見たようなアプローチの難点を免れている。しかし、センは基本財に注目するだけではその財を用いて何を達成できるのかということの評価できず、中途半端であるとする (Sen(1992) 邦訳 pp.34-35, pp.48-50)。センによれば、基本財が平等に分配されたとしても、その基本財を用いて何を達成できるかは社会的、環境的、個人的多様性により異なる。例えば、妊娠している女性は同じ基本財を所有していても男性に比べて達成できる福祉は低いであろうし、また、障害を持つ人は健常者と同程度の福祉を得るためにはより多くの所得や富を必要とするであろう。センはこのようにロールズの基本財アプローチを財によって達成できることに注目していないと批判し、自身の潜在能力アプローチと比較するのである。

2-2. 潜在能力アプローチ

潜在能力アプローチは財ではなくその財を用いて何を達成できるかにまで考慮の範囲を広げる。そして、またその達成されたことは、その達成による個人的な喜びとも区別されるという点で効用とも区別される (Sen(1985) pp.10-11 (邦訳 p.22))。センはこのような達成されたことを「機能」と呼ぶ。そして、簡単に言うに潜在能力とは個人が選択可能な機能の幅を表す。すなわち、ある個人の手に入れることのできる財の集合である個人のエンタイトルメント集合が一方にあり、その個人がそこから具体的に財を手に入れる。そして、その財を用いてその個人は実際にある機能を達成する。その際、実際には選択されなかった機能も含めて選択しうる機能の全体を潜在能力とセンは呼ぶのである。例えば、機能の栄養という側面に注目してみよう。先に見たように、所得や物価や社会的地位によりある個人の財へのエンタイトルメントの全体が決まる。そして、実際にその個人はそのエンタイトルメントの範囲内で一定の財、例えば食料を手に入れる。そして、その食料からその個人が例えば代謝率や家族内での配分により達成できる機能、この場合は栄養が決まる。しかし、実際に達成された機能がすべてではなく、どのような機能を達成するかには選択の幅がある。例えば食後にバニラアイスではなく抹茶アイスを食べることも可能であるし、あるいはまたそもそもアイスをあきらめて募金をするというようなことも可能である。このようにどのような機能を達成しうるかという選択の自由を表したものが潜在能力と呼ばれるのである。

このように機能およびその選択の幅である潜在能力に注目することは効用や基本財が重要ではないということではない。幸福であるかどうか(あるいは快樂を持つか、欲望が充足されているか)、すなわちどの程度効用を持っているかは福祉の重要な一部であり機能の一部を構成する。また、基本財があれば通常は選択の幅が広がるので、基本財は福祉を追求する自由、すなわち潜在能力の拡大への手段として重要である (Sen(1992) pp.59-62)。重要なのは、しかし、福祉やあるいは善き生を考えるにあたっては、そのような単一の評価軸では不十分であり様々な観点を考慮せねばならないということである。センは人間は社会的、環境的、身体的に多様な存在であり、また、その福祉を測る尺度も多様であらざるを得ないということを強調する (Sen(1992) pp.1ff, chap9)。

センはこのような点をそれぞれのアプローチの情報的基礎の違いという点から整理する。^{vi}すなわち、先に見たような功利主義やロールズのアプローチとの違いは最終的には福祉を判断する情報的基礎として何を認め、何を排除するのかと

いうことに帰着するというのである。例えば、顕示選好をとるにせよ功利主義的な枠組みを採るにせよ、そこで情報的基礎として認められるのは効用であり、功利主義の場合は各個人の効用の和が最大となることが目指される。この場合、分配やあるいはその分配の手続きがどのようなものであったかということは情報的基礎として認められない。ロールズの「公正としての正義」はその正義の第一原理により自由の平等を正義の情報的基礎として宣言し、第二原理、特にその格差原理においては先に見たように最も不利な立場にいる人の基本財の分配のみを福祉の情報的基礎として認める。^{vii}その際、効率性やあるいは基本財から何を達成しようのかという結果に対する考慮は情報的基礎としては排除される。センが情報的基礎として認めるべきだと主張するのはもちろん潜在能力である。センは先に見たような理由から効用や基本財だけを情報的基礎としていては福祉を測ることはできないとし、潜在能力をその情報的基礎とすることを主張するのである。

では効用や基本財が情報的基礎として不十分であるということはよいとして、潜在能力をどのように分配するのが社会的に望ましいのであろうか？功利主義的にその総和を最大化するのか、それとも、格差原理のように最も不利な立場にいる人のそれを最大化するのがよいのだろうか？センはこの点についてはロールズと親近的であり、基本的には不平等の減少を目指している。しかし、センは(1)不平等の減少と(2)多くの人にたくさんの福祉を与えるという効率性、の緊張関係を無視しておらず、その二つの要求を解決する功利主義の格率や格差原理のような方式を与えようとはしない(Sen(1999) pp.285ff(邦訳 pp.328ff))。彼は、潜在能力に注目することであらゆる社会的状態について完全な順序付けができるとは考えていない。しかし、潜在能力の(1)と(2)の両面に注目したとしても、明らかに望ましくない状態と明らかに望ましい状態との間の順序付けはできるであろう。例えば、防げるはずの飢饉を引き起こしている社会的状態よりも飢饉を防いでいる社会的状態は明らかに望ましいと潜在能力の観点から(1)と(2)の両面を考慮しても言えるであろう。(個人的な機能の順序付けについても社会的選択の関数についても全順序(total order)ではなく半順序(partial order)でよいというのはセンが度々強調する点である。(Sen(1985) chap.5, Sen(1992)邦訳 pp.66-70)あらゆる場合に答えを出せないからといって重要な点に目をつぶってしまい、明らかな不平等を放置してはならないとセンは考えるのである。

3. 内在的实在論

3-1. 内在的实在論とセン

ここまで見てきたようなセンの潜在能力アプローチには、しかし、主観的で計測不能なものを対象としているのではないかという批判がありえる。実際に示された選択やあるいは所得などを情報的基礎とするならば、それらは客観的な事実に基づいているように思える。しかし、何が機能や潜在能力であり、それらがどのようにランク付けられるのかということに関しては客観的な事実はなく主観的なものにとどまらざるをえないのではないかと思われるかもしれない。

しかし、センの機能や潜在能力は幸福などによって定義された場合の効用とは異なり主観的なものではない。問題は客観性をどのように理解するのかということにある。どのような意味で機能や潜在能力を客観的なものと考えればよいのかということについて、ここでは少し遠回りをして言語哲学におけるひとつの立場であるヒラリー・パトナムの「内在的实在論 (internal realism) ^{viii}」を考察してみたい。これは少し唐突に思えるかもしれないが、パトナム自身、センの潜在能力アプローチを内在的实在論の主張を体現する例であると考えており、センのアプローチをよりよく理解する手がかりとなるであろう (Putnam(2002) chap.3)。

さて、主観的なものと客観的なものとの区別に関するひとつの標準的見解は事実 (fact) と価値 (value) を区別するものである。この見解によると、我々の視点から独立の事実の領域と我々の視点に依存し、それゆえ主観的、相対的な価値の領域は区別される。ここで「価値」と呼ばれているものは必ずしも「倫理的価値」である必要はない。例えば、哲学史上有名な、対象の形や大きさ等の第一性質 (primary quality) と色や匂い等の第二性質 (secondary quality) を区別する議論はこの区別を反映していると考えてよい。

パトナムはこの事実と価値の区別を拒否する。彼が問題視するのは事実とは何かという点である。多くの場合、事実は自然科学の領域に入るものとして考えられてきた。第一性質と第二性質を区別する議論も、物理学の領域に入るものと我々の感覚に依存したものという区別であるし、またカルナップら 20 世紀初頭の論理実証主義者による検証主義も科学的事実でありそれゆえ観察に基礎付けうるものと価値の領域に属しそれゆえ無意味であるものとの区別を付けようとするプログラムであった。パトナムはそのような「事実」理解は非常に狭く貧弱であると批判する (Putnam(1987) pp.3-8, (2002) pp.19-27)。基礎物理学によって説明できるものは限られており、このような「事実」の捉え方では多くのものが

主観的な価値の領域へと投げ込まれてしまうというのである。例えば机のような対象も基礎物理学では単なる原子の集まりであり、電子の移動範囲や原子核同士の距離を考えればひとつの固まりとして考えることはできない (Putnam(1987) p.1)。パトナムは他に事実の領域から追放されてしまうものとして傾向性 (disposition)、志向性、因果性、反事実条件文、そして、「残酷さ」のような厚い (thick) 倫理概念をあげる (Putnam(1987) chap.1, pp.23-28, (2002) pp.34-43)。例えば、歴史学者が「ローマ皇帝ネロは残酷であった。」と言うとき、それは完全に価値判断なのだろうか？パトナムはこのような言明は物理学に翻訳できるわけではないが、だからといって事実を表していないというわけではないとする。彼によればそれは事実と価値のもつれ合った言明なのである。

我々とは独立の世界がありそれを科学が記述しているという「事実」観、すなわち科学的言語との「対応」によって客観性を説明することにパトナムは反対する。もちろん、ここまで述べたことだけで事実と価値の区別を支持する議論をすべて論駁できたとは思わないが、ここではパトナムがこのような「事実」観に代わるどのような客観性の説明を行うのかを見てみたい。パトナムは我々と独立の世界を想定することに反対し我々の実践のあり方と独立に事実があるということを否定する。しかし、このことはなんでもありということの意味しない。彼はいい実践のあり方と悪い実践、あるいは少なくともよりよい (better) 実践とより悪い (worse) 実践があることを強調する。ここで「よい」や「悪い」は倫理的な意味ではなく、合理的かどうかということである。我々の視点から独立に絶対的な真理を手に入れることができないからといって、相対主義に陥る必要はなく、我々は合理性に基づき客観的な判断を行うことができるとパトナムは考えるのである。

さてこのようなパトナムの客観性理解に基づくと、センのアプローチもよりよく理解できる。科学による単一の視点しか認めないならば、飢饉に対するアプローチは外延的な食料の供給量に基づく FAD 理論を採るほかないであろう。(実際、科学の範囲を狭く取るならば FAD 理論すら客観性の地位を持つが怪しい。)しかし、我々は様々な視点を理解し用いている。そして、倫理的視点から見れば FAD 理論よりもエンタイトルメントアプローチの方が飢饉の理解にとってよりよいものであると言えるであろう。機能や潜在能力に関しても同様である。福祉を考えるにあたっては倫理的視点が重要であり、それを抜かしては福祉を理解することはできない。そして、その視点から見れば示された選択や所得に注目するよりも機能や潜在能力に注目するほうがよいのである。パトナムは「潜在能力アプローチによると、「価値ある機能」という意味での潜在能力について語るためには、使

うことを避けられないような語彙、我々が使わねばならない語彙がある。そして、それらの語彙は、ほとんど全部、「記述的部分」と「評価的部分」に分解できないような「もつれた (entangled)」概念から構成されているのである。センや彼の同僚や追従者達が潜在能力について語る時に用いるほとんどすべての用語 - 「価値ある機能」、「ある人が価値付ける理由のある機能」、「栄養が十分である」、「早期の死亡率」、「共同体の生活に参加できること」 - はもつれた用語なのである。(Putnam(2002) pp.62-63)」と言い、我々は福祉を理解するためには事実と価値という単純な区別を拒否せねばならないということをセンの潜在能力アプローチから引き出している。パトナム的な客観性の理解に拠れば、潜在能力アプローチは我々の倫理的な視点に依存しているが十分に客観的なものなのである。

3-2 . ローレンスのカントとパトナムのカント

以上の考察から潜在能力アプローチが客観的なものであるということに納得したとしても、実際には機能や潜在能力を誰もが同意する仕方では一般的に計測することはできないので、潜在能力アプローチは使えないと感じる人がいるかもしれない。確かに、先に見たように、機能や潜在能力は人々の社会的、環境的、身体的な多様性に依りて多様であるということセンは強調していた。そして、そうならば、ローレンスの基本財のように一般的に何が機能であり潜在能力がどの程度であるかということ述べることはできそうもない。ロバート・サグデンはこの点について潜在能力アプローチに疑問を呈し、むしろ、ローレンスの合意の手続きを重視するアプローチの方がよいのではないかとする (Sugden(1993))。

このような批判をどう考えたらよいのだろうか？たとえ潜在能力アプローチが客観的なものであっても、それが使えないものならば福祉へのアプローチとしては不十分なものでしかないのではないだろうか。この点を考察するために、ローレンスとパトナムがそれぞれに自身の立場の先駆者として位置付けるカントの哲学から何を引き出したのかということを検討してみたい。

ローレンスがカントから引き出したのはその道徳に関する構成主義である。ローレンスは原初状態における合理的で自律的な個人の合意により正義の二原理が構成されるということを重視する。ローレンスによればこの合意という手続きが重要なものであって、この合意と切り離して正義に内実を与えることはできない (Rawls(1980) p.565)。ローレンスは人間の多様なあり方を認めており、原初状態にあっては合意に至るために特定の善の理解を前提とはしないことが求められる (Rawls(1971) § 22)。また、基本財に注目するのもしそのような合意を得られるの

は基本財だけであるからなのである (Rawls(1980) pp.562ff)。

パトナムもカントの構成主義的な点を評価しているが、そこから引き出す教訓は異なる。問題は合理性ということの内実である。ロールズにおいては原初的狀態で認められている合理性の主要な要素は社会的協同の公正なあり方を理解しそれに基づき行動する能力と自身の善の理解を発展させる能力である (Rawls(1980)p.528)。いずれにせよ、これらの能力は合意に至るために必要なものとして想定されている。これに対して、パトナムの考える合理性はより広い。先に見たように、彼は合理性により少なくとも「よりよい/より悪い」の判断が可能であると考え。そして、そのような判断の客観性は合意を得ることができるかどうかとは別である。我々は合意とは独立に客観性に内実を与えることができるのである。パトナムがカントから引き出したのは、我々は倫理的な視点なしに世界を理解することはできず、そして、その理解は合理性に基づく客観的なものであるということである (Putnam(1987) chap.3)。事実との対応ということでの客観性を否定したからといって、合意以外に客観性に内実を与えられないと考える必要はないのである。

先に見たように、ロールズの立場は合意ということを求めるあまりに情報を過度に制限し、明確な不正義を見過ごしてしまっているというのがセンの批判であった。セン自身あらゆるケースについて合意することを求めているわけではなく、機能や潜在能力の十全な順序付けなど必要ないとしていた。確かに、あらゆるケースについて機能や潜在能力に関して合意できるわけではないが、しかし、多くのケースについては合意できるであろうし、また、合意に至れない場合であってもその正しさを問題にできるはずなのである。合理性を完全に形式化し、どのような場合にも方程式を解くように答えを出すことができるわけではない。^{ix}しかし、そのことは様々な場合について合意を超えた客観性などないということの意味しないのである。

4. 経済とビジネスの倫理再訪

センは合意に至れないケースについては、開かれた討論の重要性を強調する。^xたとえ原初的狀態で合意に至れなくとも、我々は様々な問題について議論し理解を深めることができるというのである。議論により理性的な結論を出すことができるという理性への信頼にセンの議論は基づいている。しかし、センほど理性を信頼することはできずとも、ここまでの議論はビジネス・エシックスの諸問題に

対するアプローチを示唆しているだろう。いつも完全な答えを出すことができるとは限らないからといって、簡単に集計できるような情動的基礎にしか頼らないという態度は正しくない。様々な情動的基礎を考慮し、不完全ではあるかもしれないが、合理性に基づいて客観的な結論を出すことを目指すべきなのである。

最初に述べた飢饉の理論における FAD 理論とエンタイトルメントアプローチの対立もこのような視点から考えるとより理解できるものとなる。計量のしやすさという点から考えれば、食料の供給量にのみ注目する FAD アプローチの方がすぐれているというのは明らかであるだろう。しかし、飢饉の理論が目指すべきことは飢饉を「理解」することである。そして、計量のしやすさという視点からのみ理論を構築しては飢饉を理解することはできない。飢饉を理解するためには倫理的な視点が不可欠であり、倫理的視点を採る方が「よりよい」のである。そして、倫理的視点から見れば、様々な不公平の存在や福祉のあり方を捉えることができるので、エンタイトルメントアプローチがすぐれていると言うことができるであろう。

言うまでもないが、ここであらゆる単純化に反対しているわけではない。センはこの点について「私は採択された特定の単純化の仕方、すなわち人間（およびその感情、理想、行動）に関して著しく狭い見解を採る結果として、経済理論の範囲と射程をはなはだしく狭めてしまうような単純化の仕方に反対しているのである。（Sen(1985) p.4（邦訳 p.14））」と言う。我々は倫理的な視点を含む様々な視点の下に様々な現象を理解する。それは経済的現象といえども同様である。そして、そのような視点を切り詰めてまで単純化を目指すことが問題なのである。

ⁱ これまでの飢饉の定義については Devereux(1993) pp.10-19（邦訳 pp.10-24）を参照せよ。

ⁱⁱ センによる FAD 理論批判を支持する実証的研究については Ravallion(1997) p.1208 を見よ。

ⁱⁱⁱ そのような国の代表はインドであるが他にも多数存在している。Ravallion(1997)p.1228 参照。

^{iv} 功利主義の枠組み全体への批判として、他にセンは分配の無視と非効用的情報の無視を挙げている。（Sen(1999) pp.62ff（邦訳 pp.68ff））

^v より形式的には（Sen(1985) pp.10ff（邦訳 pp.23ff））を見よ。

^{vi} 以下については、Sen(1992) chap.5, (1999) chap.3 等を参照せよ。また、社会的選択理論の枠組みの中でのより形式的な整理としては Sen(1982)を見よ。

^{vii} 『正義論』における最終的なロールズの二原理の定式化は§46 を見よ。ちなみに、優先規則（priority rule）により二原理は第一原理の方が優先するとされている。

^{viii} 近年、パトナムは名称を改め「自然な実在論（natural realism）」と自身の立場を呼んでいるが（Putnam(1999)）、その本質的な主張に関しては内在的実在論と自然な実在論は連続的である。この点については大谷(2004)を参照せよ。

^{ix} 合理性の形式化の不可能性については大谷(2006)において論じた。

^x 例えば、Sen(1999)chap.6 を見よ。

<参考文献>

- Devereux, Stephen(1993) *Theories of Famine*, Harvester: Wheatsheaf (『飢饉の理論』、松井範惇訳、東洋経済新報社、1999年)。
- 大谷 弘(2004)「パトナムの自然な実在論とは何か?」、『論集』、Vol.23、pp.331-344。
(2006)「パトナムのゲーデル的論証」、『日本科学哲学会第39回大会発表原稿』。
- Putnam, Hilary (1987) *The Many Faces of Realism*, Chicago & La Salle: Open Court。
(1999) *The Threefold Cord: mind, body, and world*, New York: Columbia University Press。
(2002) “The collapse of the fact/value dichotomy” in his *The Collapse of the Fact/Value Dichotomy and other essays*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, pp.7-64。
- Ravallion, Martin(1997) “Famines and Economics”, *Journal of Economic Literature*, Vol.35, pp.1205-1242。
- Sen, Amartya(1981) *Poverty and Famines*, Oxford: Oxford University Press (『貧困と飢餓』、黒崎卓・山崎幸治訳、岩波書店、2000年)。
(1982) “On weights and measures : informational constraints in social welfare analysis” in his *Choice, Welfare and Measurement*, Oxford: Basil Blackwell, pp.226-263。
(1985) *Commodities and Capabilities*, Amsterdam: North-Holland (『福祉の経済学』、鈴木興太郎訳、岩波書店、1988年)。
(1992) *Inequality Reexamined*, Oxford: Oxford University Press (『不平等の再検討』、池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳、岩波書店、1999年)。
(1999) *Development as Freedom*, New York: Alfred A. Knopf (『自由と経済開発』、石塚雅彦訳、日本経済新聞社、2000年)。
- Rawls, John (1971) *A Theory of Justice*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press (『正義論』、矢島鈞次監訳、紀伊國屋書店、1979年)。
(1980) “Kantian constructivism in moral theory : The Dewey Lectures 1980”, *The Journal of Philosophy*, Vol.77, pp.515-572。
- Sugden, Robert (1993) “Welfare, resources and capabilities : a review of *Inequality Reexamined* by Amartya Sen”, *Journal of Economic Literature*, Vol.31, pp.1947-1962。

* 本稿は 2005 年 7 月 15 日に行われた第 11 回応用倫理勉強会(東京大学大学院人文社会系研究科・哲学研究室)の発表原稿を改訂したものである。会場で質問をしていただいた皆様および、草稿段階で有益なコメントを与えてくれた佐藤暁、古田徹也の両氏に感謝する。